

猛吹雪の雪洞で大型獣人クマに三日三晩犯さ
れて孕み雌になる小賢しい狐

体
験
版

第1話

吹雪の密室と、小賢しい狐の誤算

猛吹雪によって完全に外界から遮断された、雪山の避難小屋。

学園の冬季登山実習中、運悪く同じ吹雪に巻き込まれてはぐれた二人――。

メインの暖房も途絶えた氷点下の密室で、ホッキョクギツネの獣人であるユキは、真っ白でふさふさの尻尾を揺らしながら、暗がりの中で妖しく微笑んでいた。

（……ツイてる。よりによってこんなデカイ『暖炉』と二人きりになれるなんてね）

ユキの視線の先には、学園でも一際異彩を放つ巨体の持ち主、ホッキョクグマの獣人・シロが、壁際で静かに目を閉じている。身長は2メートルを優に超え、分厚い純白の毛皮の下には、人間離れした規格外の筋肉が詰まっていた。

本来なら恐れるべき絶対的な捕食者だ。しかし、今のユキの思考は、カントボーイ——男の身体に女のおまんこも併せ持つ

未分化体質——特有の発情期の熱によって、強気にゆがんでいた。

股間にある未分化のおまんこからは、果実のように甘い匂いの愛液がドロドロと溢れ出し、下着をぐっしよりと濡らしている。

ホッキョクギツネには、大型のクマの狩りのおこぼれにあずかり、後ろに付き従う習性がある。ユキは持ち前の小賢しさ

で、この無口でのろまそうなシロクマを『自分の発情を処理するための都合のいい道具』として利用しようと企んだのだ。

「……ねえ、シロくん。寒くない？」

ユキはわざと甘い声を出しながら、シロの巨大な身体にすり寄った。

「俺、すごく熱いんだ。……特別に、俺の身体で温まらせてあげてもいいよ？ その代わり、俺の言うこと、ちゃんと聞いてね？」

シロは無言のまま、氷のように冷たい青い瞳でユキを見下ろした。

その視線に一瞬背筋が凍るが、発情の熱がユキの優越感を後押しする。ユキは自らズボンと下着を下ろし、真っ赤に充血してとろとろに濡れたピンク色のおまんこを、シロの目の前に無防備に晒してみせた。

「ほら、見てよ。俺、男なのにこんな可愛い穴が付いてるんだ。シロくんみたいな図体だけの童貞には、どうせ使い方も分

からないだろうけど……俺が優しく教えてあげるからさっ♡」

クチャツ♡と、ユキは自らの指で肉びらを広げ、皮から顔を
出してヒクヒクと震える過敏なクリトリスを見せつける。

主導権は完全に自分が握っている。そう確信したユキが、さ
らに言葉を紡ごうとした瞬間だった。

ドサアツ！！

「ひっ！？」

視界が反転した。シロの雪靴のように巨大で分厚い手のひらが、ユキの華奢な胸ぐらをわし掴みにし、そのまま冷たい床へと強引に押し倒したのだ。

抵抗する間すらない、圧倒的すぎる体格と筋力の差。ユキの小賢しい優越感は、その一撃でガラスのように粉々に砕け散った。

「……狐が、クマに命令する気か？」

地を這うような低く重い声。無口だったシロの口から紡がれた、絶対強者の圧倒的な威圧に、ユキの全身の毛が恐怖で逆立つ。

「あ、あつ……！ちょ、ちょっと、痛いっ、シロくん、力強すぎ……っ！」

「自分から餌を差し出してきたんだ。……なら、骨の髄まで食い尽くされても文句は言えねエよな」

ズブリッ！！♡

「キヤアアアアアアアアアッ?!?!?♡♡♡♡♡」

ユキの甘い喘ぎを想定していた喉から、鼓膜をつんざくような悲鳴が弾け飛んだ。

シロの人間の指の太さを遥かに超える巨大な指が、愛液で滑りの良くなっていた未開の膣口へと、一切のためらいなく根元まで一気にねじ込まれたのだ。

「おッ……ほオッ?!?!?♡♡あゝあゝあゝあゝあゝッ!!」

♡♡
」

「すげエな。俺の太エ指が入った瞬間、ナカの肉壁がパニック起こして食い千切るみたいに吸い付いてきやがる。お前、さっきまでの偉そうな態度はどうした？」

「あゝあゝあゝッ！♡痛っ、大きいっ、シロくんの指っ、太すぎてっ、お腹割れちゃうッ！♡」

ユキの狭い骨盤の中が、巨大な異物によってみっちり埋め尽くされる。

シロの指はただ太いだけではない。ホツキョクグマ特有の、氷上を歩くための分厚くザラザラとした『肉球』が、過敏な粘膜のと真ん中——Gスポットを容赦なく抉り上げたのだ。

ズチュンッ！♡ズチュンッ！♡ギシィッ！♡ギシィッ！♡

「んひいいいいッ！！♡♡むりっ、だめっ、そんな激しくっ♡中で分厚い肉球がつ、ゴリゴリ削ってっ、あゝアアッ！

♡」

「おらっ！俺に都合よく使われるんじゃないのか？狐の分際で俺を誘惑した罰だ。お前のそのとろとろの未分化まんこ、俺の肉球の形に完全に作り替えてやる！」

「ひいッ♡おねがいつ、許してっ、俺が調子に乗ってましたっ！だからっ、そんな奥までっ……あゝあゝあゝッ！♡♡」

さらに、シロの空いているもう片方の巨大な親指が、外側で充血してパンパンに腫れ上がっているクリトリスを、上からズチュッ♡と重く押し潰した。

「んあゝ アアッ！！♡♡むりいッ！♡クリちゃんっ、大きい肉球で潰されてっ、息がつ、できないっ、あゝあゝあゝあゝッ！！♡♡」

「泣いて謝ったって遅エよ。お前の甘エ匂い嗅いだ時点で、俺の腹は鳴りっぱなしなんだわ」

内側はGスポットを肉球で削られ、外側はクリトリスを重い質量で押し潰される。

小賢しく立ち回ろうとした狐の浅知恵など、圧倒的な捕食者の暴力的な快感の前では何の役にも立たない。ユキの脳は完全にショートし、ただ質量に翻弄される肉人形へと成り果てていた。

「いくっ！？♡シロくんっ、おれっ、クマの分厚い指でメチャクチャにされてっ、イっちゃううッ！♡♡」

「出せ。お前の蜜、一滴残らず俺の手のひらで受け止めてやる」

ギユリギユリギユリッ！！♡♡

「ヒイイイイイイイイイイイイイイイイッ！？！？♡♡♡♡♡」

プシャアアアアアアッ！！♡♡

ユキは限界を超えた絶叫とともに、弓なりに背中を反らせ、未分化のおまんこからすさまじい勢いで大量の潮を噴水のように噴き出した。

熱い潮がシロの巨大な手と肉球をドロドロに濡らし、氷点下の小屋の中にむせ返るような雌の匂いが立ち込める。

「……ハアッ。すげエ潮だ。完全に俺の力に屈服しやがったな」

絶頂の余韻でガクガクと痙攣し、白目を剥いてよだれを垂らすユキを、シロの氷のような青い瞳が見下ろしていた。

「はひっ……はあっ……あ、あう……っ♡シロ、くん……っ、おれ……っ♡」

「俺の指だけでここまでいき狂うとはな。……だが、ホツキョクグマの本当の『質量』は、こんなもんじゃねエぞ」

シロが自身のズボンのベルトに手をかけ、重々しい音を立てて引き下ろした。

圧倒的な捕食者に捕らえられた哀れな白狐の、逃げ場のない雪山での蹂躪が幕を開けようとしていた――。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。